

113回

データでみる

国試分析

113回合格状況	p.7	不合格者の内訳	p.11
出題数と時間割	p.8	禁忌肢	p.11
出題形式	p.9	難問	p.12
合格基準	p.10	割れ問	p.13

2019年2月9、10日の2日間にわたり、113回医師国家試験が行われました。メディックメディアでは国試採点サービス「講師速報」を行い、おかげさまで7,500人を超える受験生の方に参加いただき、たくさんの有用な情報を得ることができました。

そこで、このコーナーでは採点サービスで得られた情報に基づき、113回国試の傾向はどうだったのか、受験生はどのような問題でつまずくのかを分析していきたいと思います。114回国試に向けた対策のために、ぜひ分析結果を活用してください。

113回国試合格状況

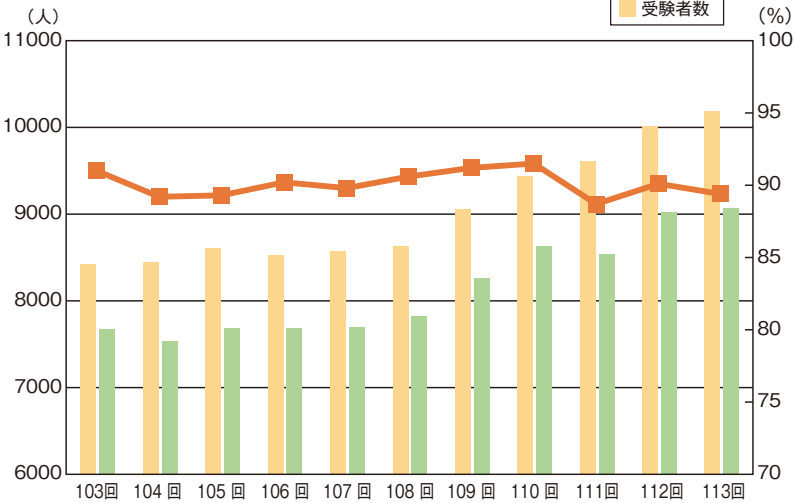
受験者数がついに1万人突破!

最初に、113回国試の合格状況と、103回以降の合格率の推移をみましょう。

113回国試合格状況	
受験者数	10,146人 (9,176人)
合格者数	9,029人 (8,478人)
合格率	89.0% (92.4%)



※ () 内は新卒



まずは受験者数。109回では9,000人を、そして112回では1万人を突破しました。対して**合格率は変わらず90%前後と安定しています**。10人のうち9人が合格する試験だけに、「他の人が解けない問題を解けた人」が合格する試験ではなく、「多くの人々が解けた問題を確実に解いた人」が合格する試験といえるでしょう。つまり、他の受験生の動向から大きく外れた勉強をしない、「**不合格とまらない勉強**」を心がける必要があります。

大学別の合格状況をみましょう! ➡



■ 出題数と時間割

出題数は各日で異なる

医師国試は、全400問を2日間で解きます。1日200問ずつ出題されるのかと思いきや、次のような配分です。

日程	分類	制限時間	出題数	形式(出題数の内訳)
2月9日 (1日目)	A 各論	165分	75	一般(15) 臨床(60)
	B 必修	95分	49	一般(24) 臨床(15) 長文(10)
	C 総論	140分	66	一般(25) 臨床(26) 長文(15)
2月10日 (2日目)	D 各論	165分	75	一般(15) 臨床(60)
	E 必修	100分	51	一般(26) 臨床(15) 長文(10)
	F 総論	155分	84	一般(45) 臨床(24) 長文(15)
計		13時間40分	400	

出題数は、各論は1日目と2日目で同じ、必修は2問差、総論は18問差で2日目が多いです。制限時間も同様に、必修と総論で2日目の方が長くなっています。

さてここで、1問をどれくらいのスピードで解いたらいいか考えてみましょう。単純に、それぞれ制限時間を出題数で割ってみます。

A 各論	$165分 \div 75問 = 2.2分$	D 各論	$165分 \div 75問 = 2.2分$
B 必修	$95分 \div 49問 \approx 1.9分$	E 必修	$100分 \div 51問 \approx 1.9分$
C 総論	$140分 \div 66問 \approx 2.1分$	F 総論	$155分 \div 84問 \approx 1.8分$

どのコマもだいたい2分で1問解かなければなりません。ただ、どの問題も均等に2分使っていないわけではありません。当然、**一般問題より臨床問題の方が問題文を読む時間がかかります**。また、どのブロックにおいても**見直しの時間を設ける必要があります**(マークミスに要注意!)。模試などを受けて、自分なりに時間配分を検討してみましょう。

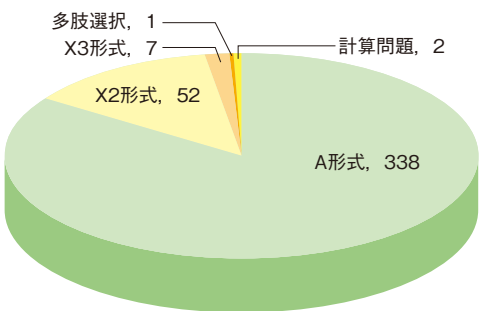


ちなみに、両日とも試験開始時間が9:30、終了時間が18:30です。2日目の制限時間が長くなっているということは、その分、**試験と試験の間の休み時間が短くなっている**ということです。休み時間の間に勉強したい場合は、このことをふまえて計画を立ててみてもいいかもしれません。

■ 出題形式

五肢択一だけじゃない!

国試の出題形式で最も多いのはA形式とよばれる五肢択一です。他に、X2形式とよばれる“2つ選べ”問題、X3形式とよばれる“3つ選べ”問題が出題されています。また、出題数は少ないですが、“計算問題”も出題されています。選択肢形式別の出題数をみてみましょう。



問題形式としては圧倒的にA形式が多くなっています。

また、昨年は姿を消していた多肢選択とよばれる“6肢以上の選択肢から選ぶ”問題が、今年は再度出題されました。

では次に、選択形式の問題の平均正答率をみてみましょう。

問題形式	平均正答率		
	111回	112回	113回
A形式	79.1%	82.6%	84.2%
X2形式	73.7%	79.4%	78.0%
X3形式	72.5%	82.4%	83.0%
多肢選択	83.8%	出題なし	30.4%

※採点除外となった問題を除いた正答率



平均正答率は、112回、113回ではA形式とX3形式で差がなく、X2でやや低い結果となりました。しかし、例年はX2、X3形式の問題の平均正答率の方が、A形式ものよりややくくなる傾向にあります(111回の平均正答率参照)。知識が曖昧なままだと、解答を1つ選べても、もう1つが選べないという悔しい結果になってしまうかもしれませんね。



3 項目全てを満たせば合格

国試では、必修問題、一般問題・臨床問題のそれぞれに合格基準が設けられています。どちらも合格基準を上回らなければ合格できません。また、ある一定数以上の禁忌肢を選択してしまうと、それだけで不合格になってしまいます。

113回の合格基準をみてみましょう。

項目	合格基準
必修問題	160点以上／200点 (80.0%)
必修問題を除く、一般問題・臨床問題	209点以上／296点 (70.6%)
禁忌肢問題選択数	3問以下

※必修臨床問題のみ1問を3点、それ以外の問題を1問1点で採点。

※必修問題の一部を採点から除外された受験者にあつては、必修問題の得点について総点数の80%以上とする（と例年対応されるが、113回はこのケースに該当する問題がなかった）。

必修問題の合格基準は、年によって変わらない**絶対基準**です。他の人ができていようがいなかろうが一定の得点を取らなければ合格できません。対して、一般・臨床問題の合格基準は**相対基準**です。他の受験生の出来具合で基準が毎年変わりますが、**例年、65～70%程度**です。

採点除外等の取り扱いとした問題

国試には毎年、合格発表時に厚労省から採点除外となる問題や、複数正解となる問題が発表されます。113回では以下の4問でした。

①正解の場合は採点、不正解の場合は採点除外	②複数正解	③採点除外
なし	なし	A5, C34, F42, F81

①のケースは、今のところ必修問題のみが該当します。

採点除外は、基本的には平均正答率の低いものが該当しますが、常にそうとは言いきれないので注意しましょう。

■ 不合格者の内訳

今年是一般・臨床落ちが多かった？

113回「講師速報」に参加してくださった方のうち、全問解答入力した方(5,186人)の成績を用いて不合格のタイプを分析してみました。「講師速報」上、不合格者は283人です。その内訳は以下のとおりです。

不合格のタイプ	人数(不合格者内の割合)
必修落ち	175人(61.8%)
一般・臨床落ち	184人(65.0%)
禁忌落ち	2人(0.7%)

※複数タイプによる不合格者も含む人数および割合。



113回は禁忌肢を選びすぎて不合格となった人は少なく、全体的に問題が解けず不合格となってしまう人が多かったようです。

さらに詳しい内訳はコチラ! ➡



■ 禁忌肢

禁忌落ちは本当にいるの？

113回では不合格に結びつくことが少なかった禁忌肢…しかし前回の112回国試以降、厚労省から送られてきた成績表上、禁忌肢を踏んでいたという方の報告が多数ありました。そこで講師速報のデータと照らし合わせた結果、次のことがわかりました。

- 113回では、禁忌肢問題は国試の全400問中、約10問
- 禁忌肢問題は必修問題以外(総論や各論)からも出題されている
- 禁忌肢問題は正答率によって左右されない
- 禁忌肢問題は相対禁忌を含み、かつ禁忌の軽重によって左右されない
- 113回では、禁忌肢を1問でも踏んだ人は受験生全体の約30%

ちなみに、実際に113回国試で禁忌判定された問題を分析し、リストとしてまとめてあります。ぜひ右下のQRコードからアクセスして1度確認しておくことをオススメします。

113回の禁忌肢問題をみてみる! ➡



■ 難問

難問と割り切っているレベルの問題数は？

平均正答率に対して著しく正答率の悪かった問題を難問といえます。実際に難問はどれくらい出るのでしょうか。まずは必修問題の難易度をみてみましょう。

正答率	問題数	
	112回	113回
90.0%~	68問	70問
70.0~89.9%	24問	20問
~69.9%	8問	10問



必修の基準として、正答率90%以上は誰でも反射的に答えられるレベル、70~90%未満は受験生であればだいたい知っているレベル、**70%未満は「これ必修なの？」とざわつくレベル**といわれています。111回では正答率70%未満の問題が例年よりも多く必修落ちがとても多かったのですが、今年は例年通りの難易度となりました。必修問題は簡単だからとたかをくくっていると、111回のように必修落ちが大量に出ることになりますのでご注意ください。

では次に、一般・臨床問題の難易度をみてみましょう。

正答率	問題数(割合)	
	112回	113回
70.0%~	229問(76.5%)	235問(79.4%)
50.0~69.9%	40問(13.3%)	33問(11.1%)
30.0~49.9%	19問(6.3%)	18問(6.1%)
~29.9%	11問(3.6%)	10問(3.4%)

※採点除外となった問題は除く。

p.10でお話したとおり、一般・臨床問題の合格基準は70.6%でした。とすると、例年70~75%を占める**正答率70%以上の問題はできるだけ落としたい問題**ということになります。また、受験生の半分以上が間違える問題(正答率50%未満の問題)は1割程度です。当日の受験生であれば、この約1割の問題が解けなかったとしても「難しい問題だったから仕方ない」と頭を切り替えて、次の問題に進むのがよさそうです。

■ 割れ問

受験生の間で解答が分かれる

受験生の間で解答が分かれた問題を割れ問とよんでいます。ただし、割れ問についての厳密な定義はありません。

今回は、最もたくさんの人に選ばれている解答の選択率が6割未満かつ、次に選ばれている解答の選択率が2割以上を割れ問と定義してみました。113回では、採点除外となった問題を除く396問のうち、35問、つまり、**約1割の問題が割れ問**となりました。

国試当日の会場では、この割れ問をめぐって色んな所で議論が起こり、「あの問題間違えたかも…」と不安にさせられることが多々あります。試験当日はあまり気負いすぎることなく、「たくさんの人が迷っている問題だし、気にせず次にいこう」と前向きに対応できるといいですね。

これからの受験生は？

難問も割れ問も受験当日であればそこまで気にすることはありません。ただ、これから受験生となるみなさんが過去問を演習する際、「難問だし解けなくていいやー」「採点除外なら勉強なくていいじゃん」と考えてよいのでしょうか。

ここでポイントとなるのがリベンジ問題です。リベンジ問題って何?!というそのアナタ！Web版「INFORMA」で詳細をお伝えします！

臨床問題の出題傾向、分野別出題数や正答率、画像問題について！

さらに詳しい分析結果はコチラから



■ 最後に

以上、データをもとに113回国試を分析してきましたが、お役に立てたでしょうか。最初にもお話したとおり、国試合格に必要なことは「他の受験生が解ける問題が確実に解ける」ことです。今まで合格してきた先輩や、周りの受験生の勉強法を意識し、同じような知識レベルと思考回路をもって本番に臨むようにしましょう。

114回国試に向けて、みなさん頑張ってくださいね！

